

竹の子童子 どうじ

(熊本県)

むかし、あるところに、三吉さんきちといふ桶屋*おけやの小僧*こぞうさんがいました。

ある日のことです。三吉は、桶を作るための竹を切りに、うらの竹山に行きました。すると、どこかで、

「三ちゃん、三ちゃん」とよぶ声がしました。

「だれだ」と、三吉がきくと、

「三ちゃん、ここだ、ここだ」といいます。

「ここへ、どこだ」

「ここだ、竹の中だ」

三吉は、声が聞こえてきた竹のそばへ行つてみましたが、だれもいません。ふしぎに思つて立つていると、その声が、

「三ちゃん、おれを竹の中から出してくれ」といいました。三吉は急いでその竹を切つてみました。すると、竹の中から五寸*すんくらいの小さな男の子が出てきました。三吉はおどろいてひっくり返かえつてしましました。男の子は、

「ありがとうございました。三吉は、こわい男の子をてのひらに乗せて、おまえはいつたい、なんだ」ととききました。男の子は、

「おれは天人てんにんだ。悪い竹の子につかまって、竹の中に入れられたのだ。それで、天に帰ることができなかつた。ちょうど三ちゃんが来たから、助たすけてもらつたのだ。こんなに嬉うれしいことはない」といいました。

「でも、どうしておれの名前を知つているんだ」と、三吉がたずねると、男の子は、「おれは、世界せかいのことなんでも知つていて」と答えました。

「ふうん。おまえ、なんていう名前だ」

「竹の子童子どうじだ」

「竹の子童子、歳とはいくつだ」

「おれは、千二百三十四歳さいだ」

「へええ」

三吉が感心していると、竹の子童子はいました。

「すぐに天に帰りたいけれど、おまえに助けてもらつた恩返しをしなくちゃならない。」
のまま帰つたら、天のお姫さまにしかられる」

「恩返しつて、何をしてくれるんだ」と、三吉がきくと、竹の子童子は、

「七つだけ、三ちゃんの願い事をかなえてやる」といいました。

「ほんとうか。うそじやないだらうな」

「天人は、うそはいわない」

竹の子童子はそういうて、三吉に、まじないのことばを教えてくれました。そこで、三吉は、教わつたとおりに、三回、口の中で唱えてみました。

竹の子、竹の子、お侍になせ

竹の子、竹の子、お侍になせ

竹の子、竹の子、お侍になせ

そのとたん、三吉はりつぱな侍になつていきました。三吉は大喜びしました。そして、竹の子童子にお札をいって、修行の旅に出ました。

竹の子童子は、そのまま天へ帰つていきましたとき。

おしまい

* 桶屋
桶を作つたり売つたりする人。桶は、ひのきや杉などの薄い板をならべ合わせて輪にして底をつけ、竹のタガでしめて作る。

* 小僧
店で使われている少年。

* 寸
長さの単位。一寸は約三センチメートル。